

一九三〇年代の中国と日中経済関係——国歌になる歌が生まれた時代——

はじめに

現在、中華人民共和国の国歌となっている「義勇軍行進曲」（原題は「義勇軍進行曲」）は、本来、一九三五年に「嵐の中の若者たち」（原題は「風雲児女」）という映画の挿入歌として作詞作曲されたものであった。当時の中国は、国民党政権の下で新たな国づくりがめざされ、経済も発展しつつあった一方、日本との間にさまざまな緊張が生じ、やがて日本による全面侵略が始まり、それに対する抵抗戦争Ⅱ抗日戦争が展開されるという激動の中にあつた。こうした時代に「義勇軍行進曲」が生まれた事情とその背景、そ

久保 亨

して人民共和国が成立した一九四九年に、すなわち歌が生まれてから一四年後に国歌として採用されるにいたつた理由（正確に言えば一九四九年の時点では暫定採用で、正式採用は一九八二年である）などを、当時の日中経済関係にも着目しながら考えてみる^{（1）}ことが、本稿の課題である。

暫定的な国歌（中国語では「代国歌」という表記）に採用されたことに加え、作詞者・田漢と作曲者・聶耳の名がよく知られるようになったため、人民共和国成立後の中国では、「義勇軍行進曲」に関し多くの論著が刊行されてきた。^{（2）}また日本でも中国での出版物に依拠した文章が何篇か発表されている^{（3）}。しかし、従来の議論では、一九二〇年代から

三〇年代にかけての中国と日本の動向、そして日中關係全体の中で「義勇軍行進曲」の誕生を位置づけることが十分になされていない。また、田漢や聶耳の人物像があまりにも中国共産党の革命史に沿って描き出されているため、一九二〇年代から一九三〇年代にかけ、彼らが実際に当時の日本に対して抱いていた複雑な感情も十分に伝わってこない。そこで本稿では、經濟面を中心に当時の日中關係に関する基礎的な事実を確認するとともに歌の作り手たちに関する新しい研究成果も参照しながら、以上に記したような不十分点や偏りを補訂し、「義勇軍行進曲」が生まれた時代について、より総合的な理解をめざすことにする。一つの歌が生まれるに際しても様々な要因が重なっており、その分析は、近現代の日中關係全体の理解にも深くかわつてくるからである。

以下、義勇軍行進曲の歌詞を掲げておく。⁽³⁾この歌詞が持つ意味については、第三節で改めて論じることにはしたい。

起て！奴隷になりたくない人々よ！

われらの血肉で、われらの新たな長城を築こう！

中華民族は最も危険な時を迎え、

一人ひとりが追いつめられ

最後の叫びをあげようとしている。

起て！起て！起て！

われら民衆が心を一つにし、

敵の砲火を冒して前進しよう！

敵の放火を冒して前進しよう！前進！前進！前進！

一 国民党政権下の一九三〇年代中国

義勇軍行進曲が生まれた一九三〇年代の中国に何が起きていたか、その要点をまとめておこう。一九一一年に辛亥革命が勃発し、翌一九一二年には清朝が倒れ中華民国が誕生した。しかし、この中華民国の統治は安定せず、一九二〇年代の国民革命によって北京の中央政府は倒壊する。そして一九二八年からは、国民革命を主導した国民党の政権が全国を支配するようになった。南京に首都を定めた中華民国国民政府の誕生である。映画「風雲儿女」が制作された一九三〇年代の中国は、この南京国民政府の統治下にあった。

南京国民政府による新たな統治は、それ以前の中華民国北京政府の統治に比べ、いくつか顕著な特徴を持っていた。

その一つは、関税・塩税・統税（綿糸、小麦粉、マッチ

などに課せられた全国統一の消費税)などの税収を確保し、財政的基盤の安定化に成功したことである。国民政府は、一九二八年から三〇年にかけて関税自主権を回復し、輸入税率を漸次引き上げて関税増収を達成した⁽⁴⁾。また長い歴史がある間接税である塩税の徴収機構を再編して中央政府の取り分を増やすとともに、新たに制定した間接税である統税によって工業化の過程からも税収を確保することに成功する。その結果、曲折を経ながらも、中央政府の財政規模は一九二八年から三六年までの間に二・九倍に拡大した。図1には、税収増に支えられ、政府の財政規模が拡大していった過程が鮮やかに示されている。政府の財政が安定したことにより、経済、教育など各方面の行政能力が高まっただけではなく、軍事力も強まり、中央政府の優位を確保して全国統一を進めることが可能になった。一九二〇年代には独立性の強かった山西、四川、広東、広西などが、一九三〇年代半ばには次々に中央政府の強い監督下に置かれるようになる。

第二に指摘されるべき点は、関税政策(一九二八―三五五年)による国内産業の保護育成、秤量貨幣の銀兩を廃止し計数貨幣の銀元のみを残した廢兩改元(一九三三年)、法幣

という政府系銀行が発行する紙幣によって全国の通貨を統一・安定化した幣制改革(一九三五年)、全国經濟委員会や資源委員会など政府直属の行政機構による産業基盤整備の推進などにより、めざましい經濟發展が見られるようになったことである。

近代的な機械制工業による工業生産が、どのような比率で増加していたかを示すのが、図2の工業生産指数の推移である。この工業生産指数は、機械制工場で生産された綿糸、綿布、生糸、小麦粉、セメント、鉄鋼などの生産量の年次推移を整理して指数化し、それぞれの品目ごとに価額構成に基づく比率を乗じた数値を算出して合計し、さらにそこから物価変動の影響を除去したものであり、工業生産全体の動向を示している。一九一二年から四九年にかけて、年平均四・〇％で上昇しており、一九三一年から三六年にかけての上昇率は五・二％であった。綿紡績業など個別産業の動向に関する研究も、こうした結果を支持するものとなっている⁽⁵⁾。また図3は、綿布、綿糸、セメント、ソーダ灰など当時の主要工業製品の自給率が、一九二〇年代から三〇年代にかけ急速に上昇しつつあったことを示すものである。

国内生産の状況の変化は、対外貿易の内容にも大きな影響を及ぼした。貿易構造の変遷を示した図4は、輸入品における軽工業製品の比重低下と機械類など重化学工業製品の比重の上昇、輸出品における軽工業製品の比重の漸増傾向

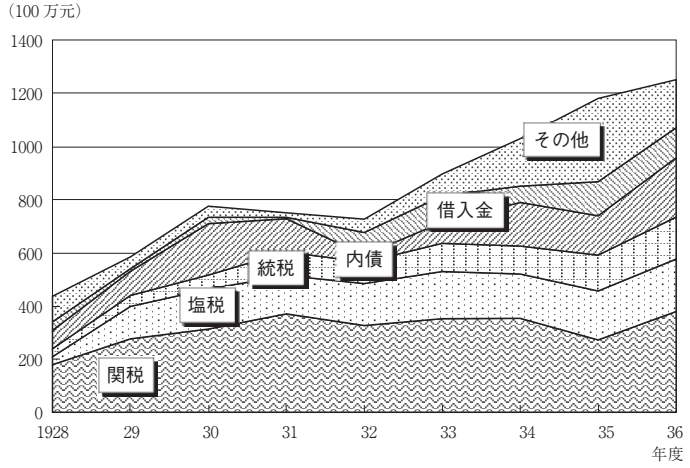


図1 中国国民政府の財政収入、1928-36年度

注：財政年度は当該年の7月1日～翌年6月30日。
 出所：A. Young, *China's Nation-Building Effort, 1927-1937: The Financial and Economic Record* (Hoover Institution Press, 1971).

を示すものとなっており、この時期、中国において緩慢ながらも工業化が進展していた事実が反映されている。後述するように、このような貿易構造の変化は、各国との経済関係にも少なからぬ影響を及ぼすことになった。

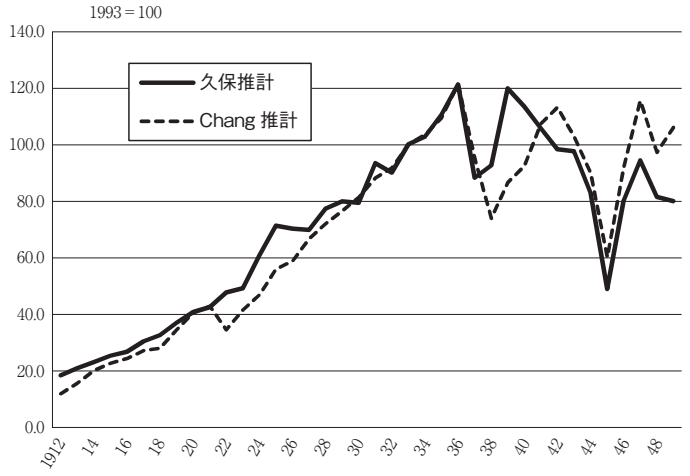


図2 中国の工業生産指数、1912-49年

出所：久保亨『20世紀中国経済史の探究』信州大学人文学部、2009年、97頁。
 南亮進・牧野文夫編著『アジア長期経済統計 3 中国』東洋経済新報社、2014年、CD-ROM版内。

第三に注意されるべき点は、以上のような政治的経済的変動の下、社会や文化全般にも大きな変化が生じつつあったことである。たとえば小学校在籍児童数の推移を示す図5は、一九二二年以降の中華民国期、中でもとくに一九三〇年代に、普通教育の普及という点で大きな前進が見られ

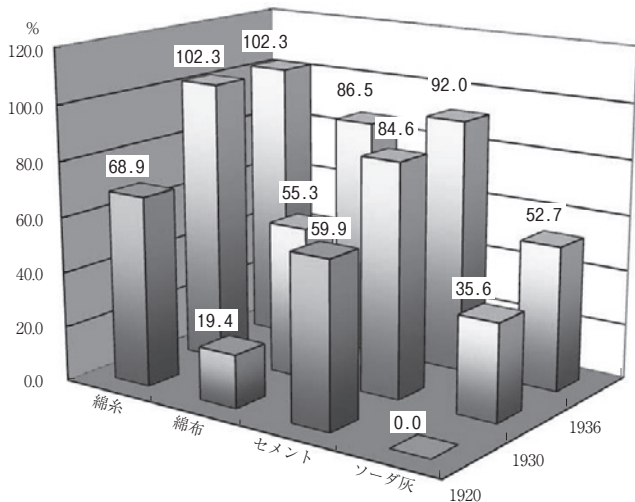


図3 中国の工業製品自給率の推移、1920-36年

注：自給率=生産量÷消費量×100 消費量=生産量+輸入量-輸出量
 出所：久保亨『中国経済100年のあゆみ—統計資料で見る中国近現代経済史—(第2版)』(創研出版、1995年)14、33、34頁。

たことを物語っている。一九二二年に雲南で生まれた聶耳も省都昆明で近代教育を受けていた。大学など高等教育や学術研究機構の分野でも、この時期、大幅な拡充が進んだことが知られている。新聞や雑誌の発行部数が増え、映画館や映画の観客数も伸びていた。

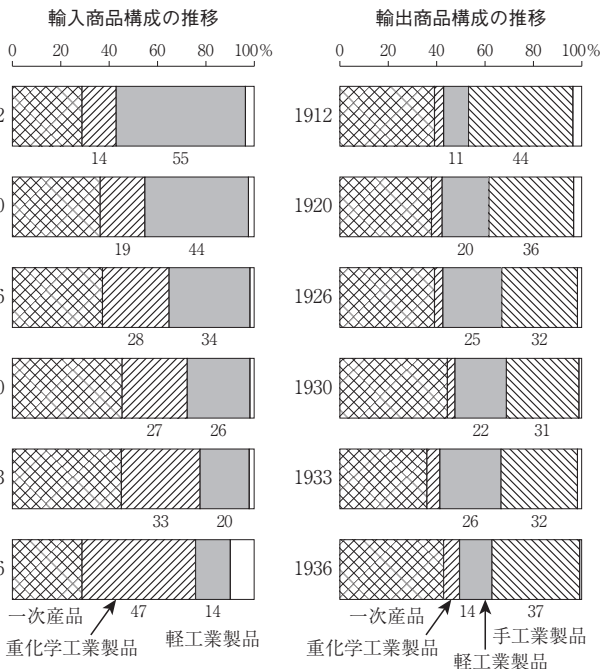


図4 中国の貿易構造の推移、1912-36年

出所：『海関報告』より独自の分類で算出。

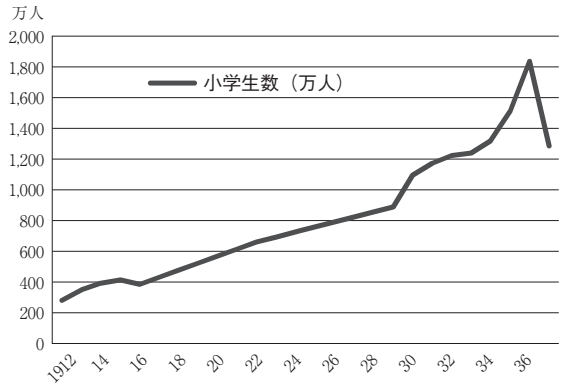


図5 中国の小学校在籍児童数の推移、1912-37年

注：1917-21, 23-28は直線補完の推計。

出所：久保亨、高田幸男ほか『現代中国の歴史』東京大学出版会、2008年、108頁。

二 一九三〇年代の日中関係

こうして国民党政権の下の中国が新たな発展を遂げつつあったことは、日中間の関係、わけても日中の経済関係に対し、複雑な影響を及ぼすことになった。そもそも当時の中国にとって、貿易関係にせよ、投資関係にせよ、日本と

の経済関係が非常に大きな意味を持っていたことを理解しておく必要がある。

貿易について、表1と表2の一九二九〜一九三一年三年平均で比べると、中国の輸出入貿易における最大の相手国は日本であった。その日本から中国への輸入の内容に大きな変化が生じつつあった。図6が明瞭に示すとおり、その大きな変化とは、軽工業製品の急速な減少にほかならない。一九二八年の済南事件や一九三一年の満洲事変に抗議して巻き起こった日本品ボイコット運動が影響を及ぼしていたことは確かである。しかし、とくに軽工業製品の減少が著しかったことは、中国国内で、日本製軽工業製品の売れ行きが落ちる一方、中国国産の軽工業製品が市場を席捲するようになった状況を反映している。保護関税がそうした過程を促す役割を果たしたことはいうまでもない。一方、日本国内で対中国輸出に従事していた軽工業経営者にとっては、これは中国市場から閉め出されつつあったことを意味していた。

日本の中国向け軽工業製品の輸出が減少していたのに対し、重化学工業製品の輸出はある程度の水準を維持していた。紡織機械をはじめ、当時の中国の工業化にとって必要

表1 中国の輸出相手国別構成の推移、1871-1993年

単位：%

年	台湾	香港	日本	アメリカ	イギリス	ドイツ	フランス	東欧	ロシア	アジア
1871-73	…	14.7	1.7	14.1	52.9	Continent (6.9)			3.3	…
81-83	…	25.4	2.4	12.4	33.3	(12.6)			7.3	…
91-93	…	39.3	7.2	9.8	11.3	(15.0)			8.6	…
1901-03	…	40.8	12.5	10.2	4.8	(17.3)			5.5	…
09-11	…	28.2	15.9	9.0	5.1	3.1	10.7	…	12.5	…
19-21	…	23.8	28.6	14.4	7.6	0.5	4.4	…	3.3	…
29-31	…	17.2	26.2	13.8	7.1	2.4	5.7	…	5.9	…
1936	…	15.1	15.2	26.4	9.2	5.5	4.3	…	0.6	…
1947	…	34.2	1.9	23.3	6.6	0.1	1.8	…	1.5	…
1952-54	…	15.1	1.0	—	2.2	W0.4	0.5	17.8	49.5	5.6
62-64	…	17.8	4.7	—	4.6	W1.9	1.4	9.4	23.9	14.0
71-73	…	25.1	12.9	0.4	3.9	W2.7	2.7	8.1	2.9	13.2
81-83	…	23.3	20.9	7.3	2.5	W3.5	1.5	3.1	0.9	18.4
84-86	…	28.3	19.3	8.8	2.5	W3.0	0.9	3.6	3.3	18.3
87-89	…	38.7	16.2	7.7	1.3	W3.1	1.1	3.4	3.3	13.3
90-92	0.7	44.0	14.1	9.1	1.0	3.1	1.0	0.6	3.1	13.0
91-93	1.1	36.9	14.3	12.8	1.4	3.5	1.1	0.5	3.1	13.2

注1：「アジア」は、日本・台湾・香港・朝鮮・ベトナムを除いた残りのアジア諸国。1929-91のロシアはソ連、1952-89のドイツは西ドイツ。

注2：記号類について(表1～表4 共通)

「—」当該時期の当該項目の数値が、0であることを意味する。

「*」当該時期の当該項目の数値が、四捨五入しても有効数値に満たないことを意味する。

「…」当該時期の当該項目の数値が、史料の欠如等により不明であることを意味する。

出所：前掲、久保『中国経済100年のあゆみ』103頁。

表2 中国の輸入相手国別構成の推移、1871-1993年

単位：%

年	台湾	香港	日本	アメリカ	イギリス	ドイツ	フランス	東欧	ロシア
1871-73	…	32.5	3.7	0.5	34.7	Continent(0.6)			0.2
81-83	…	36.2	4.9	3.7	23.8	(3.0)			0.2
91-93	…	51.2	4.7	4.5	20.4	(3.5)			0.6
1901-03	…	41.6	12.5	8.5	15.9	(6.4)			0.8
09-11	…	33.9	15.5	7.1	16.5	4.2	0.6	…	3.5
19-21	…	22.4	29.2	17.6	14.0	0.7	0.7	…	1.4
29-31	…	16.1	23.4	19.2	8.6	5.4	1.4	…	1.5
1936	…	1.9	16.6	19.6	11.7	15.9	1.9	…	0.1
1947	…	1.8	1.7	50.1	6.9	*	1.2	…	0.3
1952-54	…	9.2	0.5	—	3.4	W1.3	0.8	15.5	56.9
62-64	…	0.8	6.7	—	3.6	W2.0	4.9	5.9	13.5
71-73	…	1.7	22.8	2.2	7.6	W6.9	7.1	9.4	3.1
81-83	…	5.5	22.2	16.6	2.9	W6.5	1.8	4.0	0.9
84-86	…	11.9	32.0	12.3	2.0	W6.5	1.6	4.3	2.8
87-89	…	20.9	20.1	12.3	1.8	W6.3	2.1	3.9	3.3
90-92	5.9	26.4	16.9	11.9	1.7	5.1	2.4	1.1	4.1
91-93	9.0	19.5	19.8	11.1	1.5	5.3	1.9	1.0	4.8

注1：1929-91のロシアはソ連、1952-89のドイツは西ドイツ。

注2：記号類については表1の注2を参照。

出所：前掲、久保『中国経済100年のあゆみ』104頁。

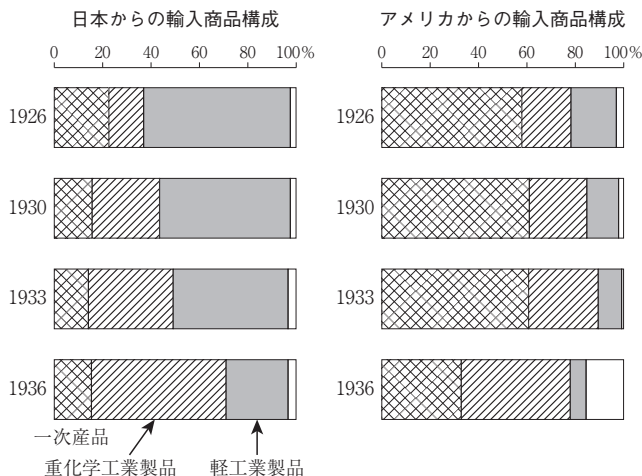


図6 日中貿易の内容の推移(付・米中貿易)、1926-36年

出所：『海関報告』より独自の分類で算出。

な機械設備類などは、日本からも相当な額を輸出していたからである。その一部は中国に開設された日本資本の紡績工場（在華紡と称された）に向けられたものであった。

表3と表4によって各国の対中投資の動向を見ると、一九三〇年代に日本はきわめて大きな存在になっていたこと

が知られる。とくに特徴的であったのは、鉱工業・交通産業などへの投資が大きな比重を占め、中国側の経済活動との間で摩擦を引きおこしやすい構造になっていたことである。

一九三〇年代の日中関係は、このような経済関係の下で展開された。一九三〇年五月に結ばれた日中関税協定が、関税自主権を回復し保護関税を設けようとする中国側の攻勢に対し低率関税の据え置きを求める日本側の守勢という交渉過程を経て成立したものであったことは象徴的である。ただしこの時点での日本は、民政党浜口雄幸内閣の下、いわゆる第二次幣原外交を進めており、外交交渉によって市場の確保をめざし、国民党政権に対しても比較的柔軟な対応をとっていた。

経済恐慌が深刻化する中、一九三一年九月に勃発した満洲事変以降、こうした状況は一変する。周知のように満洲事変は、関東軍の謀略を機とした日本の対中侵略であり、軍事力によって日本の東北権益を安定的に保持しようとするものであった。国際世論に対する中国の訴えは実を結ばず、東北地域における日本の軍事占領は既成事実化していく。一九三二年一月には、東北に続いて上海でも日中衝突

表3 各国の対中投資と総額中の比率の推移、1902-93年

単位：百万USドル、()内%

年	台湾	香港	日本	イギリス	アメリカ	フランス	ドイツ	ロシア
1902	—	—	1(*)	260(33)	20(3)	91(12)	164(20)	247(31)
14	—	—	220(14)	608(38)	49(3)	171(11)	264(16)	269(17)
31	—	—	1,137(35)	1,189(37)	197(6)	192(6)	87(3)	273(8)
36	—	—	1,394(40)	1,221(35)	299(9)	234(7)	149(4)	—
48	—	—	—	1,034(33)	1,393(45)	297(10)	—	—
'79-83	—	4,405(20)	4,114(19)	582(3)	1,060(5)	404(2)	295(1)	—
'86-89	—	9,686(27)	12,115(34)	1,286(4)	1,625(5)	1,675(5)	1,396(4)	—
'90-93	4,889(6)	32,666(41)	13,001(16)	1,533(2)	4,284(5)	2,984(4)	1,175(2)	98(*)

注1：1902-36は年末投資残高、1979-83は投資契約高累計、1986-89、1990-93は投資実績高累計。

注2：記号類については表1の注2を参照。

出所：前掲、久保『中国経済100年のあゆみ』109頁。

表4 各国対中投資の内容の推移、1907-36年

単位：百万USドル

投資国	年	総額	借入金額	直接投資金額	(直接投資内訳%)					
					工業	鉱業	交通	公共	貿易	金融
イギリス	1930	1,189.2	225.8	963.4	18.0	2.0	13.9	5.0	25.1	12.0
	36	1,220.8	161.5	1,059.3	17.0	1.5	5.8	4.6	23.0	28.5
アメリカ	1930	196.8	41.7	150.2	13.7	0.1	7.2	23.4	31.8	16.8
	36	298.8	54.2	244.6	3.8	—	2.5	28.6	38.6	21.8
日本	1907	5.8	23.0	31.4	1.7	28.1	1.5
	14	219.6	9.6	192.5	5.5	15.1	35.5	1.8	22.1	3.3
	26	19.1	7.6	21.2	2.3	21.0	11.6
	30	1,136.9	224.1	874.1	21.0	8.0	23.3	1.8	21.0	8.4
	36	1,394.0	241.4	1,117.8	29.4	2.0	50.0	0.3	4.1	8.6

注：記号類については表1の注2を参照。

出所：前掲、久保『中国経済100年のあゆみ』110頁。

が勃発した(第一次上海事変、一・二八事変)。中国の民衆の間には、日本に対する強い反発が広がっていく。

一方、関東軍は抗日ゲリラや地方軍の討伐を進め、一九三三年一月には山海関の中国軍を攻撃した。抗日世論が高まる中、中国政府は日本側の攻撃に抗して華北を守ることを決定し、軍隊を北上させ長城線及び熱河の防衛に当たらせた⁽⁶⁾。しかし同年四月、関東軍はついに長城線を越えて関内に進入し、北平郊外を占領し、五月末の塘沽停戦協定でようやく兵を取めた。この協定によって、満洲事変勃発以来の軍事行動は一段落を告げ、日本の満洲領有が確定し、満洲国の領域も事実上確定すること

になった。

塘沽協定の締結後、国民政府は「安内攘外」を掲げ、日本に対し宥和政策をとる一方、近代化と国防の充実に力を注いで将来に備える方針をとった。だが、一九三五年一月、日本軍は大連会議で華北分離、親日化の方針を立て、五月には、天津の親日紙記者暗殺事件を口実に、北平・天津からの中央政府・党機関、中央軍撤退、東北系勢力撤退、抗日停止などを強硬に要求した。国民政府はやむなく受諾を決し、六月、口頭でその旨通知し、六月一〇日には抗日運動の抑制を意味する「邦交敦睦令」を公布した。さらに日本側の強い求めに応じ、七月六日、日本側の要求を承認する旨の書函を送付し（「梅津・何応欽協定」、チャハル省でも同様の協定に応じた（「土肥原・秦徳純協定」）。

一九三五年春、映画「風雲児女」が制作されたのは、まさにこのような情勢が展開する下でのことであった。長城をめぐる日中両軍の攻防があり、満洲に続いて今度は華北が日本によって占領されようとする危機に瀕していた時である。

三 一九三〇年代の上海映画「風雲児女」

なぜ上海で「風雲児女」が制作されたのか。その背景を理解するため、中国の映画史を振り返っておくことにしたい。

(1) 一九三〇年代上海の映画界

上海は、一八九六年、日本より三ヶ月早く最初の映画が上映されて以来、中国映画揺籃の地であった。全国で映画館が一〇六を数えた一九二七年、上海には、そのうち二六館が集中しており、観客席の数の合計は六万八〇〇〇席に達していたという。たんに観客数が多く、映画館が林立していただけではない。一九一三年に最初の国産映画が制作され、一九二二年には、その後中国最大の映画会社に成長する明星影片会社が設立されている。一九二八年から三一年までを例にとると、中国国内では約四〇〇本の映画が制作されていた。ただし、その四〇〇本の映画作品の過半に当たる二五〇本は、カンフーなどの武芸ものであったといわれ、国産映画よりもハリウッドから輸入されたアメリカ映画のほうが人気が高いという状態が続いていた。

こうした状況に変化が生じたのも一九三〇年代のことであつた。都市の市民層を対象にした社会派映画も制作されるようになり、映画作品の質の向上が図られた。一九三〇年に中小の映画会社の合併で誕生した連華影業公司是、そうした映画界刷新の先頭に立った会社の一つである。連華影業公司（経営者は羅明佑。外相など歴任した羅文幹の甥）は、

孫瑜（一九〇〇～九〇年。主な作品に「大いなる路」、一九五〇年には「武訓伝」など）、蔡楚生（一九〇六～六八年。主な作品に「新女性」、「漁光曲」、「春の河東へ流る」など）をはじめ戦後まで活躍する名監督たちを抱え、一世を風靡した女優阮玲玉（「新女性」主演、一九三五年三月八日スキャンダル報道に抗議して自殺）らも連華の所属であつた。その連華影業公司是、少女たちの歌と踊りで観客を集める専属の少女歌舞団を設立していた。上海の中華書局で『小朋友』という子ども向け雑誌の編集に携わつたことがあり、中国の流行歌曲作者の祖ともいわれる黎錦暉（一八九一～一九六七年）らが設立したグループで、日本の宝塚少女歌劇（一九一四年初公演）などをモデルにしていたかもしれない。そして、この少女歌舞団に所属していた若きバイオリン奏者こそ、義勇軍行進曲を作曲することになる聶耳その人であつた。

一方、連華影業公司や前に触れた明星影片公司以外にも、当時の上海には、中小の映画会社が興亡を繰り返していた。そうした一つに左派系文化人が集まつて作つた電通影片公司という小さな映画会社があつた。この電通が「風雲児女」の制作会社である。

（2）映画「風雲児女」の制作

一九三四年の夏、司徒逸民、龔毓珂、馬徳建らの左派系文化人が集まり、電通影片公司という小さな映画会社を作つた。やはり小規模な電器設備メーカーであつた電通公司の改組によって誕生したもので、一九三五年末に解散するまでに「桃李劫」、「風雲児女」、「自由神」、「都市風光」の四本の作品を世に送り出している。「風雲児女」は、会社が創立されてから二本目の作品に当たつてゐた。脚本を田漢が書き、画家が本業であつた許幸之が監督をつとめ、一九三五年五月、上海で上映されてゐる。⁽⁷⁾

監督の許幸之（一九〇四～一九九一年）は江蘇省揚州出身で日本留學生。一九二五年から二九年まで東京美術学校（現在の東京芸術大学）に留学し卒業した画家である。在日

留学生の同志を募り青年芸術家連盟を組織した一人で、左翼思想を持った芸術家であった。在学中の一九二七年、一時帰国した際、国民革命末期の左翼弾圧に巻き込まれて逮捕され、その後、東京美術学校校長の嘆願書で保釈され再び日本に戻って留学を再開したという経歴を持つ。一九二九年、美校を卒業して帰国し、上海に新たに設立された中華芸術大学という私立の美術学校で絵画を教えながら左翼運動にも関わっていた。一九三〇年には左翼の画家や芸術家が創設した時代美術社に加わり、一九三三年には天一公司という小さな映画会社で映画制作も手がけていたことが知られる⁽⁸⁾。

青年芸術家連盟については小谷一郎の詳細な研究があり、その目的が中国国内の「革命文学」派の動きに呼応し、彼らなりに無産階級芸術運動を展開しようとするものであったことを明らかにしている。彼らはこの時、秋田雨雀、村山知義、藤森成吉、藤枝丈夫ら日本の左翼文化人とも交流を持ち、築地小劇場など日本の左翼演劇運動とも関わりを持つていた⁽⁹⁾。画家である許幸之が「風雲児女」の監督をつとめることになったのも、このような日本での経験が影響していた可能性が強い。

映画「風雲児女」の制作構想は一九三五年に持ちあがった。許幸之の回想によれば、彼自身は共産党の党员ではなかったが、左翼の文化運動を通じて知り合っていた共産党员から、若者を抗日運動に動員する映画の制作への協力を求められたのだという⁽¹⁰⁾。

「風雲児女」のあらすじは以下のようなものである。

——上海で暮らす東北出身の詩人と学生（つまり故郷は日本の占領下にある）、二人が好意を寄せる貧しい母子二人暮らしの少女が主人公。学生は、革命運動に参加した友人と関係があった嫌疑で逮捕された後、華北に向かい日本の侵攻と闘う軍隊に参加していく。少女は、母親が急死したため少女歌劇団で働くようになり、華北各地を巡業する愛国的な歌劇に出演している。詩人は、富裕な未亡人に青島で生活を見てもらっていたが、たまたま巡業してきた少女の熱情こもる歌声を聞き、友人だった学生の戦死の報に決意を固め、勇躍、敵に向かっていく。その最後のシーンに鳴り響く義勇軍行進曲。

映画「風雲児女」は興行的には失敗した。確かに、今、ストーリーを読んでみても、主人公の三人の心の動きが伝わってこないし、詩人が日本の侵攻と戦う決意を固める契

機にしても、あまりにも偶然性が強く説得力に欠ける。

しかし、映画の最後に挿入された義勇軍行進曲は、多くの人々によって歌われるようになっていった。一九三六年一二月に起きた西安事件の際、現地に赴いて取材したアメリカ人ジャーナリストA・スメドレー（一八九二〜一九五〇年）は、抗日を呼びかける民衆集会の中で義勇軍行進曲が高らかに歌われていた、と記している⁽¹¹⁾。

ここで冒頭に掲げた義勇軍行進曲の歌詞を確認しておく。

まず「中華民族は最も危険な時を迎え……」と、きわめて深刻な民族的危機感が表明されていることに注意しておきたい。これは、第二節で述べたとおり、華北を支配下に置こうとする日本の圧力が格段に強まっていた一九三〇年代前半の情勢を反映している。そして二年前の長城攻防戦の記憶が鮮明だったからこそ、「われらの血肉で、われらの新たな長城を築こう！」という言葉が生きてくるのである。また最後のほうにある「われら民衆が心を一つにし、敵の砲火を冒して前進しよう！」というフレーズは、抗日に向け多くの人々の協力を呼びかける意味を持っていた。しかし、この歌詞の中では、なぜ「敵」として日本とい

う名が明記されなかったのか。その最大の理由は、第二節で述べたように、当時、国民党政権が日本に対して慎重な姿勢を保持し、「邦交敦睦令」を出し抗日運動を規制していたからにはかならない。もし、日本という名を歌詞に明記していたならば、これを挿入歌にした映画の上映は許可されなかったであろう。ただし、たとえ日本という名を明記しなくとも、当時の中国人にとって「敵」が誰であるかは明白であり、この歌の意味も容易に理解されるものであった。

四 義勇軍行進曲の作詞者と作曲家

最後に義勇軍行進曲の作詞者田漢と作曲家聶耳の経歴を振り返り、彼らが抱いていた思想や日本観について検討していくことにする。

(一) 田漢の日本留学

作詞した田漢（中国語の発音はテイエン・ハン、日本語の音読はでん・かん、一八九八〜一九六八年）は文学者で、後述する作曲者の聶耳より一四歳年上であった⁽¹²⁾。湖南に生まれ、一九一二年に長沙師範学校に入学、同校を一九一六年

に卒業した後、同年から一九二二年までの六年間、湖南省派遣留学生を監督する役職に就いていた叔父に付き随い、日本に留学した。帰国後、一九二〇年代末から三〇年代にかけ、上海で南国社という文学者のサークルを組織し、中国における近代劇（中国語では「話劇」）の創作上演で活躍していた。

一八歳から二四歳までの多感な時代を、大正日本で、教育面でも金銭面でも比較的に恵まれた条件の下で暮らしたことは、田漢の思想形成にとって、きわめて大きな意味を持った。田漢は留学当時、毎日のように浅草や築地にあった映画館や劇場に通いつめ、大正時代の東京で近代文学、近代劇、アメリカ映画にひたっていた。この時彼が見た大正日本で上演された近代劇には、「ヴェニス商人」、「復活」、「青い鳥」などがあり、社会派的色彩の強いアメリカ映画「シユーズ」などをふくめ、六年間に一〇〇本以上の映画も見ていたという。田漢が参加した中国人留学生の文学サークルは、東京で成立し、後に主に上海で活動した創造社（一九二二〜二九年）であり、ロマン主義、耽美主義の傾向が強かった。上海へ帰国し中華書局に勤めた田漢は、自らが中心になって南国社（一九二二〜三〇年）という文

学サークルを組織しているが、その文学も同様の色彩を帯びていた。

しかし一九三〇年代を迎える頃から、上海では社会主義リアリズムと呼ばれる左翼的文芸思想の影響が広がり、田漢自身も「中国左翼作家連盟」の中心的な人物となって活躍するようになった。確認するのは困難であるが、一九三二年に田漢は中国共産党に入党した、との叙述も一部に見られる。彼とその周囲の人々の間にこうした変化が生じた理由の一つは、一九二〇年代半ば以降における国民革命の展開であり、山東出兵や満洲事変以降の日本の軍事侵略と圧迫であった。ロマン主義や耽美主義は、中国を揺さぶる激動に対応できなかつたのである。

そして田漢は、一九三五年、映画「風雲児女」の挿入歌「義勇軍行進曲」の歌詞を書くに至る。

（2）聶耳と雲南の近代

作曲した聶耳（中国語の発音はニエ・アル、日本語の音読はじょう・じ、本名は聶守信、一九二二〜一九三五年）は、中国の西南に位置する雲南に生まれ、当時上海で活躍していた若手の音楽家である。

左翼の運動に関わっていたことから、聶耳の思想は、そうした角度からのみ語られることが多い。しかし、彼を育んだ雲南の近代を抜きに彼の思想を語るべきではない。茶の栽培、銅や錫の採掘などを通じ、近代の雲南は早くから商品経済が発展しており、相当の経済力を持っていた。⁽¹³⁾ 亜熱帯の緑豊かな山々からは漢方薬の材料が多くとれ、昆明の中心街には今も薬品問屋が数多く集まっている。聶耳の生家もそうした漢方薬を扱う店であった。母は中国の西南地域から東南アジアにかけての地域で暮らすタイ族の出身であり、父は漢族で日本でいう漢方薬を扱う薬局を兼営していた漢方医であった。聶耳が四歳の時に父は亡くなり、母が薬局の経営を引き継ぎ、子どもたちを育てた。

幼い聶耳は母からは歌を、隣人からは笛や二胡、三弦など伝統楽器の演奏を学び、三人の兄弟で家庭コンサートを行うこともあった。雲南は民族的な伝統芸能が盛んな地方であったため、地元で開かれる歌や踊りの集まりに接する機会も多かったといふ。⁽¹⁴⁾

その一方、求实小学（旧孔子廟）を経て雲南第一連合中学に進み、YMCAなどで英語を学ぶとともに、中国系フランス人教員の自宅でピアノの演奏も習っていた。その後、

雲南省立第一師範学校高級部に進学した時には、親しくなった付属小学校の若い教員からバイオリンを習うこともあった。⁽¹⁵⁾

このように多彩な教育を受けることができたのは、近代の雲南が、存外、経済的に豊かで世界に開かれていたからである。豊かな資源を抱える雲南には、一九世紀後半からフランスをはじめとする列強が利権獲得をめざして入り込んでいた。一九一〇年には、フランスの資金と技術により、ベトナムのハイフォンに抜ける鉄道が開通している。欧米のミツシヨナリーによるキリスト教の布教も盛んであった。清末には日本への留学も盛んになり、辛亥革命後は日本留学生が中心になって経済や教育の改革が推し進められていた。⁽¹⁶⁾

雲南は辛亥革命が武漢で勃発した際、それに最も敏感に反応した地域の一つである。一九一一年一月二十九日、軍内の革命派が一斉に蜂起して権力を掌握し、一月一日、革命政権「大中華国雲南軍都督府」を樹立した。日本に留学し陸軍士官学校を卒業していた蔡鍔（二八八二―一九一六年）を指導者とする革命派は、同盟会会員であった若手の軍人を多数結集して社会経済改革を推進した。富滇銀行

を設立し救国公債を発行して財源を確保するとともに、そのようにして得た資金を使って模範工廠、勸業工廠などを開設し、実業の振興につとめた。また在来の私塾を改造するなどして学校を増設し、初等教育の普及につとめ、師範学校を六校設立し外国語を重視する教育改革を進めた。こうした一連の改革も聶耳のような若者を育む条件になったことは疑いない。¹⁷⁾

(3) 雲南師範学校時代の聶耳

聶耳は一九二八年末、一六歳の時に国民革命への参加を志し、師範学校を辞め国民革命軍の一部隊に入隊する。その前年、一九二七年に二五歳の聶耳が書いた「僕の人生観」と題する作文が全集に収録されている。社会変革への期待と、それに参加しようとする若々しい決意が溢れた文章である。

——悪に満ちた社会は、僕ら有為の青年との間で、まもなく闘いを交わすことになるであろう。一人一人の間にはみな社会の中にいる。社会の中で生活している以上、個人の生活を楽しむのは当然である。しかし僕らの自由がどれほどあるかというと、結局それは、何人かの

軍閥や政客が操る政府の掌中に完全に握られているように思える。彼らは何もかも自分の思いどおりになれば嬉しいのだ。そのうえ二〇世紀の科学の時代を迎えた今日も、世の中には依然として様々な悪習や新社会にふさわしくない古い儒教の教えがたくさん残っている。こうしたものをすべてを僕らは打倒しなければならぬ。言い換えれば、悪い社会を打倒し新しい社会を建設するのだ。

僕自身は工業方面にたいへん興味をもっている。もし進学する機会があれば、工学関係を希望したい。また僕は自分に芸術的な才能が少しあると思っているのだ、その個性を生かすため、芸術も学びたい。それから旅行家になり(ロビンソン・クルーソーのような個人主義的思想に基づくものではない)、世界中を見てまわり、実地の観察によって得たものに基づいて、新しい社会を建設したい。以上が今の時点での「僕の人生観」だといってよいだろうが、これから様々な環境の変化によって人生観も変わっていくかもしれない。¹⁸⁾

革命参加の意気に燃えていた聶耳は、一九二八年の末、当時雲南で進歩的な軍隊と考えられていた第一六軍が募集

した学生軍に応募し軍隊生活を始める。しかし、実際に参加してみると、革命運動との連携は見られず、兵士の待遇はきわめて劣悪なものであった。こうして当時の軍隊の厳しい現実⁽¹⁹⁾に直面した聶耳は一九二九年四月には軍隊を辞めて復学し、三〇年七月、師範学校を卒業した。

(4) 三〇年代上海での聶耳と日本

一九三〇年七月、一八歳の聶耳は昆明を離れ、その後、一九三五年三月までの大半の時間を上海で過ごした。上海へ出てきた当初、聶耳は、在日華僑であった兄の紹介で、雲南の小さな煙草問屋「雲豊商号」の上海支店店員として働き始める。上海で買い付けた高級煙草を昆明に運んで販売するという商売であったが、利益を得るために問屋が行っていた脱税行為が露呈し、その煙草問屋は一九三一年三月に閉店に追い込まれてしまう。そこで職を失った聶耳が見つけたのが、前に述べたように連華影業公司という映画会社に付設された少女歌舞団のバイオリン奏者という仕事であった。この仕事はそれほど安定したものではなく、途中、北京に新しい進路を求めて転居した時期などを挟みながら、聶耳は何度か職場を変えることになる。しかし、

全体としてみると、やはり連華の關係で仕事をしてきた期間が一番長かった。そしてこの四年の間に、聶耳は、映画挿入歌を中心に今に残る名曲を約四〇曲作ったのであった。⁽²⁰⁾上海で聶耳は日本の侵略を経験した。最初に接したのは、満洲事変勃発の報である。

——今日、九月二〇日の一番の大事件は、新聞の「日本軍、瀋陽を占領、満鉄線を爆破」という大見出しだった。

……日本が中国を侵略するのは、十分予想されていたこと。万宝山事件や中村「大尉」失踪事件などを見るがいい。みんな彼らの悪だくみではなかったか？ 現在彼らはなんと東北地域を侵犯するという大事件を引き起こし、帝国主義的な横暴をほしのままにし、飛行場や兵器工場をみんな占領してしまった。……会社で食事をしていた時、皆この事件について話していた。彼らの議論は要するにナシヨナリズムに基づいたものであって、これが必ず第二次世界大戦を引き起こす要因になり導火線になる、ということをおわかっていない。いったい今どうすればよいのか？ 誰かに解決を期待しようなどというのは、たわごとだ。何が国際連盟だ。彼らは同じように暮らす仲間などではない。⁽²¹⁾

また一九三二年一月に起きた第一次上海事変の際は次のように書いている。

——大砲が僕の誕生日を祝ってくれた。今朝の五時から始まり、午後の四〜五時頃になる今も大砲の音はやんでいない。呉淞や閘北で激戦があり、日本の軍艦が一隻撃沈され、飛行機が一機撃墜された。たくさんの民家が焼けてしまった。……世界全体が動揺を開始したのだ！ 帝国主義の衝突と第二次世界大戦の始まりは、今や隠しようもない事実になっている。僕の進路問題も同時に動揺し始めている。芸術の研究ということも、どうやら長い間続けていくのはできなくなりそうだ。社会環境が決めるところにより、いつも障害と刺激を感じている。まして僕の重視してきたクラシック音楽が、きわめて革命的であることを考えると……。

考えがくるくる混乱してしまい、不安でいっぱいだ。何といっても今日、二〇歳の誕生日を迎えたというのに。とにかくもう一度考えをまとめてみよう。少なくとも自分の進路のことについては、見通しを立てるための手がかりも多いはずだ。すべてものが激動の中にあることを、よく認識しなければならぬ。⁽²²⁾

この時期、聶耳は友人を介し、勤務先の同僚であった明月歌舞劇社少女スターの年賀状を目にし、強い衝撃を受けた。

——「暴風雨が吹きさすさぶようなこの激動の時代の前夜、暴虐な日本の侵略はなおやまず、

緊迫した事態は私たちを悲嘆させ、憤慨させる。
悲嘆は人生の最後を示すもの、
失望は世紀末の象徴。

でも時代の大きな車輪はまわり続ける。

それは私たちに告げる、

人生を墓場に埋めてしまつてはいけない、

時代の進歩は私たちに新しい希望を与えてくれる、と
いうことを。……

一九三二年大晦日、万茜

この年賀状には心底びっくりした。夢ではないか、と思ったほどだ。

身体じゅうの血が沸騰し、感情が高ぶり、心が躍った。この万さんの年賀状に書かれた詩を、友だちに見せてもらった時のことだ。この詩を彼女自身が書いたのか、どこから写してきたのかなんて問題じゃない。要す

るにとでも注意を引きつけられてしまったのだ。彼女がこんなことを考えていたなんて、まったく思いもよらなかった。⁽²³⁾

このように一九三〇年代上海の映画界で青春を送った聶耳は、社会派映画の制作に協力し多くの楽曲を創作するとともに、満洲事変、第一次上海事変などの日本の中国侵略に対し強く反対する態度を書き記した。しかし同時に聶耳は、日々、仕事と生活に追われながら、外国語の修得にも並々ならぬ熱意を見せている。とくに一九三二年の夏から秋にかけて、北京（当時の名称は北平）に赴き国立北平大学芸術学院を受験し、それに合格しなかった時は、真剣に日本留学を考えるようになった。⁽²⁴⁾

しかし、この時は、留学資金のメドが全く立たなかった。日本行きか、北平残留か、上海帰還か、という三つの選択肢の良い点と問題点を整理した一〇月の日記には、聶耳の揺れる心が率直に表現されている。

——日本行き。良い点——日本語をよく読めるようになること。国外に出て、音楽や劇を考察できること。

問題点——経済的に見て正規の学校に通うの

は困難であること。自分の日本語の水準が低いので、直接、活動に参加できないこと。

北平残留。良い点——引き続きトノフ（当時、北平にいたロシア人のバイオリン演奏家）の下でバイオリンを学べること。「中略」空気が澄んでいるし、北京語も聞き取りやすいこと。

問題点——生活費も学費も欠乏し、落ち着かないこと。雲南会館（聶耳が当時、寄宿していた同郷会館）で十分に音楽の練習ができないこと。（後略）

上海帰還。良い点——収入の道があること。学費免除でバイオリンを学ぶことができ、楽団に入ることも希望でき、張りのある生活を送れること。音楽に接する機会も多いこと。問題点——今のところ思いつかない。⁽²⁵⁾

結局、さまざまな金策も尽きた聶耳は、日本に行くことを諦め、上海に戻ることを決めた。⁽²⁶⁾

しかし一九三二年一月に上海に戻った後も、聶耳は日

本語修得に対する関心を持ち続けた。一九三三年の日記には、探し求めた日本語教科書が書店から撤去されたことを店員から聞かされ、「自分はないへん不思議に思った。抗日なら日本語を読んではいけない、とでもいうのだろうか」と、そうした単純な反日の動きに疑問を投げかけるとともに、自らは日本語の勉強を続けようとの決意を記している。²⁷⁾

そして一九三五年四月、聶耳は、本当に日本へ来てしまふ。当時、国民党政権による左翼運動への弾圧が強まっていたので、それを避けるため外国へ行くことにした、との説明が多く、それを避けるため外国へ行くことにした、との説明が多くなる。概説書には記されている。ただし説明の根拠は回想録の類ばかりで確たる史料は明示されていない。むしろそうした配慮がある程度働いていた可能性は否定できない。

その一方、確実なことは、すでに明らかにしてきたとおり、聶耳にとって日本語は年来の夢の一つだったということであり、日本にやってきた聶耳は、期待に胸を膨らませ留学生生活を始めていたことである。親しかった友人や母親への手紙には、次のような感想が書かれていた。「この一ヶ月というもの、音楽会通いの毎日だ。日本の音楽界の

活発なことは、まったく驚くばかりだ（むしろ中国に比べたことだが）。とくに春というこの季節は、演奏会がない日というものがないほどであり、時には日に二つも三つも開催されている。……日本人の家に下宿しているので、会話の機会も多い。……大家さんはアメリカに一年暮らしていたことがある人なので、英会話も忘れないですむ」。²⁸⁾

「毎日四時間、語学学校に通うほか、たくさんやることがあります。どんなことをしているかというところ、日本の音楽の研究であり、音楽会を聞きに行くことです。毎日とても忙しくしており、上海にいたときより、やることが多いです」。²⁹⁾

こうした手紙を見ると、毎日のように音楽会や劇場に通い、周囲の日本人と会話を楽しみ、濃密な留学生生活を送っていた様子がうかがえる。同時代日本の文化状況に対する強い関心と評価を感じざるを得ない。侵略に対する批判と文化に対する関心とが並存していたところに聶耳の日本観の特徴があった。

(5) まとめ

作詞者田漢と作曲家聶耳の二人とも一九三〇年代の上海

が生んだ時代の子であったこと、そして二人とも日本に深い縁があったことを、まず確認しておきたい。彼らの日本に対する思いは単純ではない。日中関係緊迫化の原因の多くは日本側の侵略行動にあり、彼らがそれに対する強い反発と批判を意識していたことは確かである。しかし同時に、彼らは、近代日本が生みだした社会と文化を理解していた。それ故にこそ、日本の侵略行動を批判していたともいえる。聶耳は一九三五年に亡くなり、田漢も一九六八年に世を去ったため、日中戦争が終結し、最終的に日中の国交が正常化した一九七二年以降、彼らの一九三〇年代の日本観がどのようなものであったかを確かめることはできない。しかし幸い、映画「風雲児女」の監督を務めた許幸之は一九八〇年代まで健在だったため、興味深い感想を書き残している。その内容については節を改め、最後に触れることにしたい。

おわりに

一九三五年春、義勇軍行進曲が誕生した背景には、一九三〇年代の日中関係が存在した。すなわち、一方には、新たに成立した国民党政権の下、経済発展と国力の強化に歩

を進めつつあった中国があり、他方には、既得権益の保持拡大をめざし軍事力に頼る日本があった。そして、日本の支配領域拡大の焦点になった華北を守り、日本の華北侵略に対する抵抗を呼びかける歌として、義勇軍行進曲は制作された。

しかし義勇軍行進曲と日本との関係は単純なものではない。作詞者田漢は東京高等師範学校の卒業生であったし、この歌を挿入歌に用いた映画「風雲児女」の監督許幸之は東京美術学校の卒業生であった。二人とも青春の数年間を日本で過ごした留学生であり、大正から昭和にかけての日本を自ら体験していた。また、作曲者の聶耳には在日華僑であった兄が存在し、聶耳自身、近代日本の文化と社会に強い関心を抱いて来日し、曲を完成させたのも来日後のことであった。義勇軍行進曲の制作に関わった人々は、いずれも日本と向き合い、日本を理解しようとしていた人々だったのである。義勇軍行進曲は、日本の華北侵略に対する抵抗を呼びかける歌であって、けっして日本の存在そのものを否定するような反日の歌ではなかった。

映画「風雲児女」が上映され、義勇軍行進曲が発表された後の日中関係は、どのようなものであったか。以下、簡

単に整理しておこう。

一九三五年一月、国民政府が第一節で触れた幣制改革を実施すると、日本軍はその妨害に努め、華北の将領に対し「華北五省自治」を働きかけるとともに、親日政客の殷汝耕を首班に冀東防共自治委員会を設立し、翌一二月には自治政府に改め、中国の行政権から分離させた。同政府は、塘沽停戦協定で規定された北平・天津の東から長城に至る非武装地帯を領域とし、満洲国に引き続く、二つめの日本の傀儡政権である。華北では日本軍の策動、分離工作とともに、経済進出や人的進出が相継いだ。華北に渡った日本の浪人の中には、治外法権特権を利用してアヘン密売等の違法業務に従事するものもいた。また、冀東では、日本側は中国側関税管理を無視して大規模な貿易を行い、中国の産業及び政府財政に大きな打撃を与えた（冀東密貿易）。

日本の華北に対する新たな侵略の動きは、中国で激しい危機感を呼び起こし、急進的ナショナリズム運動を再燃させた。一九三五年一月九日には北平（北京の当時の名称）で学生達による大規模な抗日デモ運動が敢行され（一二・九運動）、これを契機に全国各地に抗日救国運動が波及し、多数の救国団体が設立され、三六年六月にはその連合体と

して全国各界救国連合会（全救連）が設立された。全救連は著名なジャーナリストや弁護士などの無党派知識人が指導者となり、彼らによる内戦反対、一致抗日という主張は、世論に大きな影響を与えた。

義勇軍行進曲は、こうして全国に広がった抗日救国運動の中で歌い継がれていくことになり、一九三七年に日中全面戦争が勃発してからも抗日の歌として全国に広まっていた。映画としては「風雲児女」は不評に終わったとはいえ、義勇軍行進曲は中華民族意識を形成した抗日統一の記憶を象徴するものになった。こうして、一九四九年、中華人民共和国が成立した時、暫定的な国歌に採用される道が開かれたのである（正式採用は一九八二年）。

作曲者の聶耳は、来日後の一九三五年七月、湘南海岸で遊泳中に水死した。作詞者の田漢は、戦後も中華人民共和国政府の演劇関係部門の責任者として活躍していたが、一九六八年末、「文化大革命」の混乱中に失脚し、獄中で病死した（一九七九年、無実の罪であったことが確認され名誉を回復している）。

映画を監督した許幸之のみが文革の後まで生き延び、中央美術学院の教授などを歴任した。許幸之は、晩年、次の

ような回想を書き残している。

——昨秋（一九八〇年）のある日の午後、旧作の絵を整理していたら、東京に留学したころの習作を発見した。

この絵は、解放前（一九四九年以前）の苦しいときも、いわゆる「文化大革命」の十年の動乱のなかでも手元に残してきた、最も初期の作品だった。それは、「晩歩」といって一九二六年の作品で、東京の水道橋近辺の黄昏を描いたものである。五〇年前の習作の色あせて暗く絵の具がはげ落ちた絵を見てみると、わたしは当時の東京をまざまざと思い出す。水道橋のたもとと九段下の坂道をぶらぶら散歩し、若い同級生と上野公園内の美校の校庭に集まっていたことなど、往事のことが絢爛たる走馬灯のように浮んで消えていく……⁽³⁰⁾。

日本の侵略への抵抗を呼びかける映画を撮った監督の、その若き日の最も大切な思い出が刻まれた地の一つは、ほかならぬその日本であった。一九三〇年代の、そしてその後の日中関係の展開に改めて思いをいたさざるを得ない。

〔付記〕

本稿は、二〇一三年七月一三日、大阪経済大学日本経済史研究所「黒正塾第一五回寺子屋」で行った講演「一

九三〇年代の中国と日中経済関係——国歌になる歌が生まれた時代——を基礎にまとめた文章である。機会を与えていただいた大阪経済大学の皆様と講演を聴いて下さった皆様に心より謝意を表しておきたい。

- (1) 『聶耳全集』全二巻（文化芸術出版社、一九八五年）。
- 王懿之『聶耳伝』（上海音楽出版社、一九九二年）。
- (2) 岩崎富久男「一九三〇年代の『抗日救亡』文化——聶耳と抗日救亡歌曲運動——」（明治大学人文科学研究所紀要）第四四号、一九九九年。岡崎雄児「聶耳（ニアール）——中国国歌作曲者と日本——」（『東北公益文科大学総合研究論集』第五号、二〇〇三年）。
- (3) 歴史学研究会編『世界史史料』第一〇巻（岩波書店、二〇〇六年）二四三～二四四頁（解説・高田幸男）。原詩は『田漢文集』（中国戯劇出版社、一九八三年）。
- (4) 久保亨「戦間期中国（自立への模索）——関税通貨政策と経済発展——」（東京大学出版会、一九九九年）。
- (5) 久保亨『戦間期中国の綿業と企業経営』（汲古書院、二〇〇五年）。
- (6) 以下、通史的叙述の部分は久保亨・土田哲夫・高田幸男・井上久士共著『現代中国の歴史』（東京大学出版会、二〇〇八年）を参照。
- (7) 程季華主編『中国電影發展史（第一卷）』（中国電影出版社、一九八〇年（第二版））※初版は一九六三年）三七八～三九五頁。本書は一九三三年に発足したという上海

の共産党組織の映画部門指導グループ（同書、一八四—一八五頁）が計画した動きであったとする。しかし、当時、国民党政権打倒の方針を掲げ武力革命を展開していた共産党の組織は、政権側の弾圧を受け上海などの都市部では壊滅的な打撃を喫しており、系統的な運動が可能ならなかった。したがって電通公司の映画制作も、共産党の指導によるものというより、共産党とのつながりがあった左翼文化人の協同の成果という側面が強かったものと見られる。

- (8) 許幸之「東京でかいた一枚の絵」（人民中国雜誌社編『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』東方書店、一九八二年）。前掲、程季華主編『中国電影發展史（第一卷）』二二四、二八一頁。

- (9) 小谷一郎『一九三〇年代中国人日本留学生文学・芸術活動史』（汲古書院、二〇一〇年）。

- (10) 許幸之「憶聶耳」（『人民日報』一九八二年二月一五日）。

- (11) アグネス・スメドレー（高杉一郎訳）『中国の歌（上）』（みすず書房、一九五七年）一三二頁（原著 Agnes Smedley, *Battle Hymn of China*, 1943）。

- (12) 以下、田漢の日本留学に関する史実は、小谷一郎「田漢と日本—『近代』との出会い—」（『日本アジア研究』創刊号、二〇〇四年）、小谷一郎「創造社と日本—若き日の田漢とその時代—」（伊藤虎丸・祖父江昭二・丸山昇編『近代文学における中国と日本』汲古書院、一九八六年）、などによる。田漢は、中華人民共和国が成立し

た後、中国劇作家協会主席や政府文化部の戯曲、芸術部門の責任者などをつとめた。戦前米の話劇に加え、京劇など伝統演劇の改革にも関わり、京劇『白蛇伝』などの上演台本も執筆した。しかし一九六六年からの文化大革命で批判されて失脚し、その渦中で没した。

- (13) 陳征平『雲南工業史』（雲南大学出版社、二〇〇七年）第六章第二節など。石島紀之『雲南と近代中国—周辺の視点から—』（青木書店、二〇〇四年）。

- (14) 前掲、王懿之「聶耳伝」一八—一九頁、三一—三五、三八、四〇—四一頁。

- (15) 同右、四四—四六頁、六五—六七頁。

- (16) 一九〇二—一一年の雲南からの日本留学生として、三七二人の名が確認されている。周立英『晚清留日学生与近代雲南社会』（雲南大学出版社、二〇一二年）。

- (17) 雲南の辛亥革命とその後の改革を可能にした条件としては、(一)清朝が一九〇九年に設立した雲南陸軍講武堂という士官学校に革命派が結集し、四七人の教員の中に監督李根源（一八七九—一九六五年、日本留学経験者）をはじめ同盟会の会員が一七人、同調者が一人も存在し、軍内に強い影響力を持っていたこと、(二)大理における革命派の蜂起には英領ビルマ（現ミャンマー）在住華僑の支援を得ることができたこと、(三)社会経済の近代化がすでに相当な程度まで進展していたこと、などが指摘されている。革命政権指導者の中に日本留学経験者が多かったことは、聶耳が早くから日本語の修得をめざ

していたこととも無縁ではなかったであろう。

- (18) 「我的人生観」(雲南第一師範学校作文簿)、『聶耳全集』上、文化芸術出版社、一九八五年)二〇頁。

- (19) 前掲、王懿之『聶耳伝』六八〜七九頁。

- (20) 同右、一〇〇、一三一、三三八〜三四二頁。

- (21) 聶耳「日記」一九三一年九月二〇日、前掲『聶耳全集』上、三〇七頁。

- (22) 聶耳「日記」一九三二年二月四日、同右、三六四頁。

- (23) 聶耳「日記」一九三二年一月四日、同右、三四七頁。

引用文中の「万茜」は本名・万青山、明月歌舞劇社の少女スターの一人であった。

- (24) 「外国語の修得に努力しよう。日本語と英語については自分は基礎ができています。」聶耳「日記」一九三三年九月二六日、同右、四六九頁。「今日から日本へ行く夢の実現をめざすことにする。よく考え、(周囲の人々と)話しあってみよう。」同右、同年一〇月五日、同右、四七〇頁。

- (25) 聶耳「日記」一九三二年一〇月一三日、同右、四七一頁。

- (26) 聶耳「日記」一九三二年一〇月二五日、同右、四八〇頁。

- (27) 聶耳「日記」一九三三年二月四日、同右、四九二頁。

- (28) 聶耳「書信」艾思奇宛、一九三五年五月一日、同右、一五五頁。艾思奇(一九一〇〜六六年、雲南)は昆明時代の友人の一人で、上海では隣に暮らしていた。日本留

学の経験があり、マルクス主義の政治思想家として有名になる人物である。なお聶耳の連絡先は「神田区神保町二丁目二番地二 梶原方」だった(二五九頁)。神田区は、現在、東京都千代田区の一部。当時、神保町のあたりには、多くの中国人留學生が暮らしていた。

- (29) 聶耳「書信」雲南の母親・兄・姉宛、一九三五年六月四日、同右、一五八頁。家族を安心させようという思いも働いていたであろうが、とにかく明るく雰囲気溢れた文面である。

- (30) 前掲、許幸之「東京でかいた一枚の絵」六一頁。

(くぼ とおる・信州大学人文学部教授)

